

野口 健

アルピニスト

「環境省への期待」

東京都の委員を務めていた関係で、小笠原諸島におけるエコツーリズムの推進および東京都独自のレンジャー制度を実施するにあたり、現地で地域住民と意見交換を行う機会があったが、東京都と地元とのコミュニケーション不足を痛感した。エコツーリズム推進の上でこのコミュニケーション不足こそ最大の障害となる。人間は本来的に保守的なもので、変化を好まない。観光業を生業としている人間にとって、環境保護の側面を持つエコツーリズムは、そのスタイルがまだ周知徹底されていないために、単純な観光業の規制ではないかと受け取られる可能性もある。

環境省は平成 16 年度より、全国に合計 13 箇所のモデル地区を設置し、3 カ年計画でエコツーリズムの普及・定着を図るとしている。推進組織としては、地域住民、観光協会、ガイド候補者、そしてコーディネーターが掲げられているが、私はこのコーディネーターこそがキーマンとなると思う。更に会議で配布された資料にも記してあったが、「ルール遵守のための監視方法とペナルティ」も時には必要となる。

私はこれらの役割は行政サイドの人間が果たすべきだと思う。もっと言えば自然保護官（レンジャー）が担当すべきである。環境省のレンジャーは約 230 人いると聞いているが、その多くは現場に出ずに、許認可事務に追われている。予算の関係でどの程度の拡充が可能なのかかわからないが、レンジャーを増やし、エコツーリズムを推進する上でのコーディネーターとしての役割を期待したい。それが無理な願いならば、東京都が今夏から独自のレンジャー制度を開始したように、自分達の地域は自分達で守る、といった地方主権のレンジャー制度の普及につとめてもらいたい。

世界的なエコツーリズムの先進地であるガラパゴス諸島は、「乱獲の島」から「エコツーリズムの島」へと変貌を遂げた。その背景には非常に優れたコーディネーター役がいたのである。そしてガラパゴスでは、自然を徹底的に保護することにより、観光業者が利益をあげるというシステムが完璧に機能している。だからこそ成り立つのだ。エコツーリズムとは環境保護と観光振興の両立でなければ意味がない。国の観光政策は国土交通省が担当しているが、特に PR の面などでうまく連携を図って、縦割りの弊害の打破を期待したい。環境省には常に期待しているし、応援団でありたい。